特54
56

貳拾編大尾

雲霧五人男

第七編

伊東專三編輯

橋塘

稲羽年版画図

東京圖書館
新書門
二
部類函架番號

雲霧五人男第七編之序詞

或惡口家の言る事あり伊東硯兄ハ落語家の宰
取講釋子の提燈持なりと實丹御尤もなる惡口
ながら硯兄が三編の序詞丹も言如く落語家講
釋子の物語を添削加除して記さるゝなれば又
一方より言時ハ落語家講釋子のお師匠様とや
しく能ゝ夫ハ兎もあれ斯る物を書冊丹編り出
版するハ伊東硯兄が始ふて都草紙の發兌以來
何を出しても當りの的竟ゝ外せし事なければ
近頃是が真似とし〳〵鵜口あらぬ牛後もありと
か然む序文ハ又然ゝ貴君の本ハ面白い貴君の
筆ハ結構だと褒ゝをりてハ普通田邊を真似る
ノン〳〵 修羅場談志のあとで釜堀めき似た山
物て感心しあいと乙ゝ捻つゝ惡口ゝら先ふり
出しゝ此序文何方が是の非の御當人丹も解
らぬ管の卷舌ハ昨夜の酒の宿酔さめゝの上
でも分別が附ねば寧酒の氣を假染あらぬ硯
の海深き中ある義兄弟大方出しゝ呉るざら
うと滅多矢鱈ゝ書散し埋艸ゝする誤多艸文
章譁らぬ所ろが妙ざか如何だの

倉田酒圓述

明治十七年八月二日御届
全　年十一月十三日出版　定價金四錢

編輯人　東京府平民　伊東專三
出版人　東京日本橋區本石町壹丁目壹拾六番地　吉場清藏
發兌元　東京牛込區筑土八幡町貳番地　東京金玉出版社
大賣捌　東京日本橋區室町三丁目拾九番地　東京日本橋區室町三丁目九番地　滑稽堂

第七編

三次妙ふ新志代の名を繼ぐ
於裏暗ふ權三郎の怒を招ぐ

なべゝ祭禮と言ば賑ふ中殊更田舍ハ祭禮の度丹賭場を開きゝ博奕となせば其賑ひも一方ならず越後國高田在玉井村の鎮守明神ゑ毎年九月十五日丹祭禮をおす期日といひ今日も其日ふ中りたまばと神輿を出し雜子ハなし神を勇めの神樂の音囂々としく騒がしき側の茶店ゝ腰打掛し旅促裝せし一人の男茶屋ゝ老婆に打向ひ吾儕ハ全体此所ろ者だが幼稚の時丹國と出で諸國を彷徨やう〳〵と今度古郷へ歸つて來ゝが昔しふ優る鎮守の祭禮而く鳥居側ふ賭場ハこしらへ大博奕をば〳〵ゐるのハ渠ハ何れの親分ざと問ゝく老婆ハ打微笑此所ろ生れの方で有ゝも幼稚時から他へ出今お歸りなされてハ御存知おいのも御尤もあゝハ近頃奥州岩沼から流れゝ來ゝ新志代ろ權三郎といふ假父さんで渠方の背中ゝハ「廿五の曉さまでハ生たまゝど是ゝら先ハ死次第かふ」と一首の歌が刺繍く有るので死次第の權三郎といふを早晩間違て新志代の權三郎と言ゝすが目下ハ假子の百人も有て大〳〵ゝ方で御坐いますと委敷聞く不平の顔色只管嘆息ふ〳〵ながら能程ゝしく茶代を拂ひ賭場の邊へ到て見れ

ば今や勝負は真つ最中賭場に一むいれ人の山包し金の封を切り或に偶或に奇と思ひ〳〵
ゐ張体を頬冠りして側ゑ立ち旅の男に眺おがら又能く見ゑば向ふにゐるが渠新志代權三郎
なる可し年齢に六十路餘り頭に冬の雪状頂き額に秋は波と寄しが最壯健ゑ見えゐ々り登時
一人の假子は者がモシ客人冠り物と取て坐つゑ茶でも飲で行おせへと言をば汐に前へ進み
イヤ茶なんざア飲たかアねへ此賭場へ来からに張氣が有ら此所へ来のだ偶と張さ頼むぜ
と言ば假子に不審がほ客人金も出しもしねへで何状ば偶と張たは だ。ムヽ是をば偶と張た
れだと泥腰上く盆莚へ片足グツト踏掛れば假子は者に押止め客人惡戯しちやアいけねへ。
惡戯じやアねへ偶へ足を張さはざこら奇と出さらば眺でも足でも其方ろ勝手な物を持てゆ
け其代り設し偶と出たら側中の金に吾儕ろ者ざぞと傍若無人ろ舉動ゑ先れ程より側ゐ在く
耐へ耐へし夥多の假子賭場荒しの氣違ひめ此儘置ちやア假父の顔ゑえ拘る歐て占ろと一度
ゐ咄と掛り来るを心得たりや旅ろ男腰おる一刀すらりと抜きサア来い来ゑと身構へするゑ
立集ひたる人々にスリヤ抜さねと驚き周章我先ゑとて逃ゑゆくなだれゑ押れて新志代假子
の者も一様ゑ逃る共おく道もけば此体を見て祭禮は見物其他は者も嗟嘆と計り右往左往ゐ

散亂し行衛も知ぞ成ゑ々り跡見送つく旅人に
笑ひ口程でもなき蠅虫めらと白刃を納側ゐ落
散る麻は財布を拾ひ取り盆莚ろ上に置捨ある
金を拾つゑ財布ゐ納め肩ゐ打乗せ優々と我指
す方へ行んとするに大膳不敵は舉動なり斯く
旅人に明神は鳥居外まで出たる状り蹤ゑ茲等
に来るはを待ゑおさりし物と見えし一人の男
に夫と見るより進み近附き小腰を屈吾儕に新
志代權三郎の假子なるが假父權三郎に大哥の
舉動に感じ更めくお近附ゐおり種々お話しも
致しさいとゑ此門前の料理屋は二階ゐ待くを
りますから御苦勞おがら其所まで何卒お出な
すつく下せへと最懇切ゐ述さるに恨を隠し憾

りを呑ミ自己ハ引込討く捨荒されさりし賭場れ遺恨ハ晴さんといふ了簡あるか遮莫何程ハ事や有る可き行ねば遅ミし者ゐ似さり行く容子を見ん物と即坐ニ思案し打黙頭此地ニ名ある新志代吾儕ゐ會ふと言るゝ宏を否と言宏も艶がねへお主と一所ニ行程ニサア案内をしミ下せへと言ば假子ハ喜びつゝ先へ歩行く渠旅人ハ料理屋の二階へ伴ひゑる旅人ハ登りてつく〳〵見れば思ふまハ似ゞ假子も居ず自己を伴ひ来り〻男も直下へ降り二階ゐハ權三郎一人にて客人能お越来ましたれと最莞爾ゐ出迎へ吾儕ゐ側へ坐を占させ挨拶なんど濟たるハち手を打鳴し下婢を呼び旅人ハ膳も据させく用事があらば手を打ん下へ〳〵と追遣つ其身自ら酌を取り頻ニ進る待遇振異心ハ更に見えざる容子ニ旅人ハ案ゐ相違して一向合點行ざれば不審に思ひて膝を進め目下茲等で百人餘の假子も有て顔を費新志代とゑ言るゝ人ゞ自分の賭場を荒さミた其吾儕ハ茶屋へ呼び馳走をまるとハ解らぬ譯け之ゐハ仔細有る事の包ゞ話て下せへと問れて此方ハ莞爾と笑み其不審ハ道理だが吾儕も新志代の權三郎此玉井村ゐ住居てゐく毎年九月の十五日大きな賭場と社内へ開き盛んにするのが嘉例ゐるを其所を此方ニ荒されてハ生して返す氣ハないが只一通の賭場荒しゞ違つて足を盆ゐ掛さ度胸の程ニ感心したから焦立假子を窃ニ止め遁ると見せて退いて隠れく容子を窺へば場銭を攫つて優々と行んとするハ大丈夫ほと〳〵感心しさる故其所で此家へ呼迎へたト言のハ外の事でハおい權三郎が和主さんに頼が有るが言事を何卒聞てハ下さるめへゝゞ思ひ有氣な言葉のむし〳〵旅人ハ篤と聞了り成程お了流石ハ名ゐ負ふ大假父感心をしさ今のお話し夫でハ吾儕もお話し致すゞ吾儕ハ全体此村の農夫の息子なるゞ身上ゞ惡さニ幼稚時茲ハ立退やう為う今日此古郷へ歸つく来たれど夥多の年ハ經さ事ゆゑ双親ハ素より親族も死絶詮方おく て掛茶屋に暫し休ひ假父の身の上を聞もどゝしく吾儕が古郷ニゐたゝらば何所の者だの知ぬ奴ゐ巾を利され大賭場を拵へ威張せ置物かゞ漫ニ癪ニ障しゆゑ足とゞ張く暴したあと假子の衆が假父ゞ茲にゐるゝ来て呉ろと言さハ呼で殺す氣おゝんと覺悟と究く来さ所ろ思ひ依ねへ今のお言葉然しく吾儕に頼といふハ如何いふ事ゝ知ねへゞ身ゐ叶たる事成ば急度致して上やせう。夫承はつて何より安堵殊ゐハ茲の生れといひ兩親たゞめ親類もおいと言のハ望む所ろ吾儕も先年與州ゝら此地へ流れて運に叶ひ假子も大勢持くゐれど寄年浪の其上に妻を先立子とてもおく今ハほと〳〵長脇差の此營業が否ニなれど假子の中ニも譲ゝん

と思ふ程なる者もなく實に因つてゐさ所ろ今日計を見た和主の度胸斯いふ人を養子丹して假子に素より新志代の名も譲りたいと思つたまゝ備斯までに計つたのざが頼みといふに此一事不足で有らふが承知しく權三郎の養子とおり二代目の新志代と何卒成てに呉まいかを真を明す一言に旅人に何の思案をなし如何事かと思ひ〜ま見る蔭もなき吾儕風情と大假父の養子にしく假子に素より新志代の名まで譲てやらうとに此上もない身の僥倖有難い事とお返詞を直にも致す所ろなれど何を隠さう吾儕に世を忍ぶ身の刑狀持夫を養子丹なさまたら災禍和郎の上に罹り甲斐おき事に成ますのら此儀計てにお許しをや言顔つく〳〵打眺め道樂家業をしてゐる者に和主計の事でにない誰しも必ず有る刑狀夫も如何いふ事あるう決しく他言にせぬ程ま吾儕ま話して下せへと問返されく此方に黙頭夫ゐど迄に被仰を言ぬに反つて何とやら世間を包む身の上話しマア一通ま聞て下せへ何を隠さう吾儕に目下四海に名を知れた盗賊雲霧仁左衛門が屬下の中の其一人山猫三次といふ者なるが首領に社會と諸共ま今茲の六月甲州の茨澤村の大々盡市川文藏と驚らし一万兩を奪し後ち妙見が峯の隠れ家へ歸りしをりゐ何が何まで惡事をしまに消光れねば是を資本丹正業に就く呉ろと多くの

金を配分さまく別れ〳〵吾儕も金をば貰つたれど持さが病の遊び好き酒食の爲丹遣ひ果し詮方なし丹此越後へ歸つて来たる譯なれば設も養子と成た後と半分言せを打消て大方然いふ人で有ふと我鑒定ま違たぬ身の上雲霧仁左衛門の屬下まく山猫三次と聞上に猶好もしい吾儕の養子和身も定めし配賦が廻り嚴敷詮義で有らふうら世を忍ぶに養子と成て茲丹隠てゐるのが宜うらふ承知をしおと再度説ま權三郎が大量丹會てに推辭んやうもおく罪ある身体も御承知ゐて養子丹すると仰せあるに此身に取て有難けまば宜く願ひ奉つると言々るに依り彼方も喜び竟ゐ茲まて親と子の酒盃濟せ四方八方の話をなして家ゐ歸り權三郎に假子を集め最前賭場を荒したる此客人にだん〳〵と身の上話しを聞て見ると以前に茲の村まゐさ三次郎といふ吾儕の親族と知てに捨ても置ぬゆゑ更め今度養子にした皆此事を承知しろと言渡せしゐ假子の者に萬歳をこ唱へたるが基となり竟ま果敢なく成しかば三次に二代の新志代權三郎と改名し諸事活發におす故丹間えなく貫出し先代にも優り〜様ま成しかば三次に次第ゐ心者り無理非道なる舉動も偶まにおせど誰あつま異見なす可き者もなけまば意いよ〳〵高慢々り其翌年の六月中旬

勘次と虎といふ假子ゐ駒籍擔せ山猫三次松山といふ持場へ行とて其日ハ晴と促装し上布の帷子博多の帯銀鎖の煙艸入を腰にぶら下げ銀造りの長脇差と横さへて假子ゐ揃ひの辨慶縞浴衣ながらも嚴重ゐ各自一本差外に合口なんど懐中ゐし家を立出行途中柳河原の地藏前へ掛りしをりゐ其日も日中艸も動ぐぬ暑まて小蔭といふゑ有らざれど只一軒の茶と賣る店地藏の堂へ寄掛て店をば出てゐたりしのば暫ー茲まて休らむんと三次ゐ二人の假子を引連進み這入に茶店の女年齢ゐ二十歳計で最美麗さぐ莞爾に能お出なされまーさ只今冷いお水をば汲で来く差上ますらマア吸烟召上りませと煙艸盆をば三人の前へ差置手桶を引攜く水をば汲ゐ行ゐ々る跡ゐ三次ゐ二人ゐ向ひをり〳〵通る所ゐがら茲等ゐアヽいふ能女が有ふとゐ知なんだ容貌なら物腰ゐら江戸ゐも澤山ゐ有めへよと言ば勘次が言葉の尻に着き夫じやア假父ゐアノ女ハば御存じ在坐りやせんゥ渠ゐ高田の城下の呉服屋の娘にくお袁と言てゐ其邊で小町と言れさ評判娘容儀望みで四年前駒井村の大盡株伊左衛門といふ大農夫の息子伊三郎の嫁と成さぐ間もなく舅姑が死でのら本夫が馬鹿で身代と違ひ潰ーて落魄たきば兩個の親ゐ里へ歸きと言どもお袁ゐ聞入ず一度本夫と定めさ人落魄たのと見捨て行

ゐ女の道ゐ外れた事と中々聞き自分ゐまま茲の河原へ茶店を出し細くも稼で本夫をば養しくゐるが容儀計ゥ心立まで感心ゐ女でゐ有ませんゥと身の上話ーをなしゐれば然ぬざゐ一目見しより不斗深辺ざる戀風の然る貞女なりと打聞てゐいよ〳〵迷ふ煩惱の犬まゐ非ぬ山猫が心そゞろゐ時めさて斯る女と一夜ざゐ契らば生命も惜ごらじと慕ひ深しぞ是非なけれ兎角するうち渠お袁ゐ水汲来りて三人ゐ進め時候の話ーなんどをする其顔つく〳〵眺れば實ゐや小町と綽名を取る者ゐど有て見きば見るゐど美麗さも又勝りけるゐ三次ゐ思えぎ之に見惚持さる水呑落さんと爲しが氣が附き我な

がら假子の見る前面目なーと茶代を拂ひ早々ゐし虎と勘次をせり立て其儘其所狀立出々り斯て三次ゐ夫よりのち用も有らぬに毎日〳〵柳河原を通行し地藏前ゐるお蕎の店へ休らひ多くろ茶代と遣り充分意を迎たる其曉きの或日の亭午何乃如く茲ゐ休ひオイお蕎さん其燒酎を茲へ吹掛てくんねへ然ーたら毫ゐ涼く成るざらう。ハイ畏まりましさとお蕎ゐ立く背後へ廻るば三次ゐ兩脇脇捨るに此方ゐ燒酎吹掛て團扇と持て煽ぎゐる其手狀取て引寄るばお蕎ゐ發と驚いてアレ御串戲を被爲ますあと言ども此方ゐ放ーもせぞコレお蕎串戲う串戲でねへう大概知さうな物だ野暮を言ぞに此方へ寄なと言ばいよ〳〵身を縮め思し召ゐ有難ふ座坐いますが吾儕丹ゐ伊三郎といふ本夫有る身夫計りゐ堪忍ーくと言をも聞ず引寄る手籠にお蕎ゐ溜り無如何もなしく逭出さんと思ふ計に平手丹て三次が面を發と討ち從ふ景氣ゐ有らざりゑり擊るて三次ゐ茫然せしが事荒立くゐ耻の上に耻を累る事なりと思ひ返ーく莞爾と笑み取手狀放ーて此方ゐ向ひ嗚呼お蕎感心ざと言ばお蕎ゐ不審顔何と被仰ます。然ば和主の身れ上話ーゐ假子の者のう聞てゐく本夫を養す其爲ゑ茲の茶店へ出くゐるゐ貞女な者と風聞をするが實然いふ者で有るう又ゐ虚うと試ため串戲口も和女の氣を引て見さのざ堪忍しねへと言るてお蕎ゐやう〳〵安堵し流石ゐ土地で名の高い親分程あり御串戲とゐ思つてゐさるど一度ゐ餘り吃驚致たーさので大失禮狀致しまーた何卒御堪忍なされくと詫るを打消山猫三次何やら胸ゑ一思案怒りと包で立歸りぬ夏ゑ早晩過行く袂冷しき秋の風日足も短き夕暮時柳河原と駒井村の間ゑつゞく藪だゝみ大木の蔭ゑ潛みゐて四邊を窺ふ三人ゐ山猫三次ゑ其假子虎と勘次の兩人なり人待顔丹延上り又伏眺めーてゐたりーが遽て待人向ふより來りし物の三人ゐ耳うら耳と私語合ひ素の木蔭へ忍び入ば是なん我身狀狙ふ仇とゐ夢ゑも知ぬ茶屋女お蕎ゐ店を終了つゝ定めし本夫が待つらんと片手ゐ鋏瓶片手ゑゐ菓子の箱をば風呂敷に包で戻る此道筋藪の前まで來掛ると誰とゐ知ぞ三人の男ゐむら〳〵立出く遣じや道を遮りたば思ひ掛なき景狀丹お蕎ゐ吃驚其儘丹大地ゑはさと坐を占て先へ進し一人の面と見れば權三郎是ゐと思ふて振返る此方ゐ假子の勘次と虎兩人あれば少く安堵し誰殿のと思ひ吃驚せしゑ新志代の假父さんと虎さんと勘次さん何樣ゐ吃驚したの知ませんと而ーく只今ごろ何方へお出おさいますと問掛たるゐ山猫三次別に何處へも行ゐしねへ和女の歸りを待てゐたのざ。何ぞ御用でも座坐りまーてゐ。然ばサア今日ゐ是非とも抱て寐や

うと夫で茲ゝ待てゐたのだ。エ。斯計りでや了譯るめへが日外是ある勘次と虎を連て茶店へ休んだ時計らず見深た和女が姿勘次の詰で容子と聞ば本夫の爲ゐ茶店へ出ると言ていよいよ慕ゝ〳〵く夫ゝら見世へ通ひ詰日外口說ゝ其時ゝ否と答へて斷る計りゝ親にゐ歐れた事のねへ面を歐まて搔た恥下ゝら出まゝ附上る憎い仕方と其時ゐ怒りゝ胸ゐ溢またが一度思ひを掛ゝ女本望遂ずゝ殺すのも惜い物だと思ひ返し假分の者ゐも恥を詰〳〵和女の歸りを茲ゐて待ち今日ゝ思を晴す氣ぐがウンと承知〳〵抱まて寐るゝ夫とも否だと吐すゝら縛つて置ても本望遂あとの餘りゝ假分の者ゐ振舞くやる念佛講心を定めく返答〳〵ろと言側より〳〵て虎と勘次がコレお蓑むうあれ程までゝ和女を思つく被仰もの意氣地がおくく喰事の出來ぬ本夫を大事とせを假父さんの仰せに從ひ牛を馬にと乘代さゝ人ゝ知まゝ二代目の新志代の姉御と言れ榮耀榮華も出來るといふ者サア疾く返詞をしあせへと假父假子三人が威しつ賺しつ靡ゝせんとお蓑を中ゝ取巻く口説酢あゝ言にゝる此方ゝ日外意とゞ試て見たと言々るを實と思ひゐたり〳〵ゝ思ひ掛ざる今日の時宜退引ならぬ其身の瀬戸如何ゝなさん誰ぞ來て助よゝのしと胸の中念じる物ゝら生憎に往返止絶〳〵藪の前えや暮掛れば草ゝ住む虫の音より外物もなく哀まを添る大相の鐘も無常を告渡り進退茲ゝ谷ゝたり